

武蔵野日曜聖書講筵

わが主キリスト

――詩篇第46篇――

1996年5月12日

小池辰雄

我らの神は堅き城なり 魂の教育 神・キリストに捕まっている 無者キリスト 無即無限無量 第二の宗教改革 神はわれらの避所 キリストと一つにされている 間違った民主主義 聖霊の火を投ぜん

【詩篇46】

- 1 神はわれらの避所^{さけどころ}また力なり、なやめるとき^{いと}の最^いちかき助けなり。
- 2 さればたとい地はかわり山はうみの中央^{もなか}にうつるとも我儕^{われら}はおそれじ。
- 3 よしその水はなりとどろきてさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん。
- 4 河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ至上者^{いとたかきもの}のすみたもう聖所をよろこばしむ。
- 5 神そのなかにいませば都はうごかじ、神は朝つとにこれを助けたまわん。
- 6 もろもろの民はさわぎたち、もろもろの国はうごきたり。神その声をいだしたまえば地はやがてとけぬ。
- 7 万軍のエホバはわれらともなり。ヤコブの神はわれらのたかき櫓^{やぐら}なり。
- 8 きたりてエホバの事跡^{みわざ}をみよ、エホバはおおくの懼^{おそ}るべきことを地になしたまえり。
- 9 エホバは地のはてまでも戦闘^{たたかい}をやめしめ弓をおり戈^{ほこ}をたち戦車^{いくばくの車}を火にてやきたもう。
- 10 汝等しずまりて我の神たるをしれ。われはもろもろの国のうちに崇められ、全地にあがめらるべし。
- 11 万軍のエホバはわれらと偕^{とも}なり。ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。

●我らの神は堅き城なり

この詩篇46篇に基づいて、マルチン・ルターが讃美歌を自分で作詩作曲した。彼は作曲もできたひとですね。素晴らしい讃美歌です。私はこれが非常に好きなので、ほとんどドイツ語で暗誦できるくらいです。非常に調子の深いよい詩です。



「[EIN FESTE BURG IST UNSER GOTT]

『我々の神は堅き城なり』（私訳）

1 我々の神は堅き城なり。

攻防自在の武器なるぞ。

今や我々は苦難に遭えど、

神は一切の助けなり。

かの古昔よりの悪しき仇敵

今や真剣に抗い来たる。

大なる権力多くの謀略は

その強悍しき武器にして

現世に彼の敵なし。

2 我々の力何をか為し得ん、

我ら忽ち失わるべし。

我らのために戦う義人あり、

神自らの撰びの人ぞ。

たずぬるか、かは誰と。

その人はイエス・キリスト、

万軍の主なる御神ぞ。

いかなるあだし神にも非ず。

戦の場はその聖手にあり。

3 縦いこの世は悪魔に満ちて

我らを全く吞まんとすとも、

我らいたくは戦慄かじ。

勝利なお我らにぞある。

此の世の君主はいかばかり、

立腹に立ちはだかるも、

何ごとも我らになし得ず。

彼はすでに審判かれてあり。

聖言の一言、彼をば倒す。

その徒輩聖言を空しうす、

これに一念の感謝あらなく。

聖子は戦の場にて我らに与す、

彼れの聖霊と恩恵もて。

敵どもは取らば取れわが生命



たからほまれ
財も誉も子も妻も。

すべてのものを奪い去れ！

彼ら何をか勝ち得んや。

神の国こそ我らには在れ。

これは非常に力強い詩ですね。

「我々の神は堅固な城である」

という。いわゆる旧教に対する新教の最初の戦いの宣言が、ルターのこの讃美歌なんです。ルターの一番根底となるところの讃美歌がこの詩篇46篇です。これは

「ルターの讃美歌」

と言つてもいいくらいです。

サタンというのは強い悪の力ですが、それに我々が勝とうとしても勝てない。

「この地上には彼にかなうものはいない」

とルター自身も詩の中で言っている。我々はもしサタンと戦おうとすると、自分でやろうとしたら負けてしまう。ところが、

「我々のために戦つてくださる人がある。それは神さまが選んだかただ。これがキリストである。万軍の主である。他のいかなる者でもない」

という。

●魂の教育

日本の政治家で宗教的な根拠を持つている人が一体いるだろうか。もとを尋ねると、日本の教育そのものの、教育者そのものが、本当の意味で宗教の世界をもっていないのが大方です。ですから、実は日本では本当の教育はできない。教育の根底に偉大な宗教をもたなければだめだ。これは、ゲーテもそういうようなことを言っています。ビスマルクも、

「神さまの他は何ものも恐れない」

と言っている。

リンカーンというのは非常に深い信仰をもったひとです。彼は、

「アメリカの政治は神の下（アンダー・ゴッド）にあるんだ」

ということをはつきり言っている。神さま抜き政治は政治にならない。そういうことをリンカーンははつきり言っている。そういう意味で、日本は信仰のある政治家がいらない。

何といつても、ヨーロッパ、アメリカはキリスト教——私は

「キリスト教」

とは言いたくない、

「キリスト道」

です——キリスト道が教育の根底にありますから、違うですね。その点で日本は非常にう



すつぺらい。ですから、我々、福音を持つている者は――男でも女でも、学校に関係があるうがなかるうが――若い人たちの魂の教育をしなければならぬ。その魂の教育は、むしろ、家庭におけるお母さん方がなさる大事な仕事だと思う。

それはやはり、聖書を読まなければだめなんです。聖書を何か特別なものだと思っていなくても、冗談じゃない。これは世界的なものですから。日本人もそれだけの大きな根底をもたないと、日本の将来は、精神的にいつまでたっても望みはもてない。どうぞ女の方は恐れなく大胆に、

「聖書を読まなければだめだ」

という意味で、大いにお子さん方を教育していただきたいと思います。

「万巻の書があるけれども、聖書一卷にかなうものはない」

とは、ゲートル自身も言っている言葉です。何といっても、聖書は、特に新約聖書、それから旧約では預言書と詩篇は非常に大事です。預言書と詩篇と新約聖書というのは大変なものです。どうぞ、そんなことでよろしくお願いいたします。

● 神・キリストに捕まっている

私は「信仰」という言葉は好きではない。もし「しんこう」というなら、神との交わり、「神交」

と書く。信じ仰ぐのではない。私は信じ仰いでなんかいない。神との交わりです。神・キリストの中に入ってしまう。

「私はどこにいるか」といって、神・キリストの中にいます」

ということ。私の魂の人間は、神・キリストの中にいる。捕らえられている。こっちが入っていくというより、むしろ、神・キリストに捕まってしまっている。逃げようとしたって逃げられない。これが本当の神交の世界です。神さまの方から力がくる。お母さんは、子供が叫ぶよりも先にお母さんの方でちゃんと子供を知っている。そして、お母さんの方から子供の方へ走ってくる。そういうのが神交の世界です。

「信じ仰ぐ」

なんていうのはだめなんだ。

絶対者が絶対界から相対界に切りかかってくる。太陽の光は、我々が求めなくたって、太陽は地球を照らし、地球の生きとし生けるものを活かしている。こっちからお願いして、やっているのではない。お天道さんの方が、地球をひっぱりまわして、地球の生きとし生けるものを活かしている。そういうのが本当の現実ですからね。

ゲートルは死ぬ二週間前に、

「私は太陽とキリストの他には、自分が本当にその前に平伏するものはない」と告白している。



「自分の自然的生命は全く自然界の太陽おかげだ、靈的生命はキリストのおかげだ。太陽とキリストの前には無条件に平伏す」

と言った。

●無者キリスト

日本人は道の民だから、

「キリスト道」

と言いたい。キリスト道は世界的な道であります。道は自分で歩かなければ、道の道たることがわからない。眺めていたらだめなんだ。

「私は信仰なんてありません。自分で信じ仰いでなんかいません。私は圧倒されて
いる。キリストの力と光に圧倒されて生きています」

と。自分は無力で、文字通り

「無者」

です。無者の最たるものはイエス・キリストなんです。イエス・キリストは神の他に何も
ない。そういう霊止なんです。だから、私はキリストのことを

「無者キリスト」

と言っている。父なる神の他は何もないんだ、イエス・キリストというひとは。その中に
入ってしまったから。だから、もの凄い力がくる。

「我何ごとをも為しあたわず」

というひとが一切のことをした。

「無即無限無量」

なんです。ゼロになると無限無量になる。イエス・キリストがそういうかたなんです。彼
はゼロなんです。自分は何もできない。何もできないひとが一切の凄いことをした。それ
は神さまの力がやってきたから。そのような無の自覚です。

一体、無というのは本当は東洋的な観念ですよ。老子が

「無道の道」

と言ったでしょ。無道の道を歩いているものがある。何ですか。空の鳥です。空には何も
道なんかありはしない。道の無いところを自由自在に飛んでいる。私は人間でなければ鳥
になりたいね。自由自在にどこでも行ける。

なにしろ、己に絶すると、もの凄いものが来ますから。自分をサムシングだと思ってい
るうちは、いつまでたってもだめなんだ。

「それでも私は少しはできます」

なんて、そんなことを言っているうちはだめなんだ。

「何もできません」



と、キリストがそう言っているんだから。ヨハネ伝に書いてある。

「我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」(ヨハネ5・30)

「自分の意志ではない」という。

●無即無限無量

大麦のパン五つと小さい魚二つでもって五千人を満足させた。イエスというひとは大変なひとだね。私はイエスはこういうひとかというのと、ただ

「大変なひとだ」

と言う。大変なひとで、説明なんかできません。解釈なんかできません。もうキリストの前に平伏だけです。何か説明して、それで分かったような顔しているのがよくいるね。冗談じゃないよ、説明なんかできるものではないんだ。

「もう、参りました!」

と降参する。降参すると、その世界に入れていただける。降参しなければだめなんだ。分かるの分らないのではない。

「降参いたします!」

と言うと、キリストが捕まえて入れてくださる。

空に時々、虹がでる。虹は水滴だ。水滴は本当はひとつも色がないはずだ。ところが、人間の目に七色に光る。無色透明の太陽の光を受けとって、無色透明なものが七色に光る。ということは、無色透明の太陽の光は実は驚くべき無限色のものなんだ。だから、

「無即無限無量」

という。いわゆる信仰なんかありません、何もありません。そうすると、キリストの力に、生命に圧倒される。圧倒されて生きているだけです。平伏して生きているだけです。

●第二の宗教改革

第二の宗教改革です。マルチン・ルターは宗教改革をした。ということは、カトリックはローマ法王を立ててやっている。そうではなく、

「キリスト直結でいけ」

というのがルターだからね。これが宗教改革になった。

私はこんな所であなた方と語ったって、どこにも分からないから、いずれ、書くものを書きます。それを書きおえるまでは地上を去るわけにいかない。本当は、テレビでもって一席やりたいんだよな。いわゆる専門家ばかりに頼んでいるから、あんなテレビはだめだよ。



いわゆる専門家というのはだめなんだ。本当は、素人しろうとがいい。

イエス・キリストも素人なんだ。パウロもみな素人なんだ。後から専門家らしくされたけれども、そうではない。神さまから直接、力と光と智慧とをいただいているひとはみな素人なんだ。ルター自身がそうだ。カトリックから出てしまった。彼はもともとカトリックだからね。

「とてもローマ法王となんかやつてられない。私はキリスト直結でいきます」と、これが宗教改革になった。

●神はわれらの避所

その改革の宣言の讃美歌が詩篇46篇です。だから、詩篇46篇というのは非常に歴史的に大事なものです。

1 神はわれらの避所さけどころまた力なり、なやめるときいとの最ちかき助けなり。

我々にとつては、この「神」はキリストです。キリストは我らの避所である。また力である。悩めるときさけどころのいと近き助けである。全くそのとおり。イエス・キリストです。キリストは避所である。「避所」とはおもしろい言葉だね。キリストの中へ逃げていけばいい。そうすると必ず勝つ。

2 さればたとい地はかわり山はうみの中央もなかにうつるとも我儕われらはおそれじ。

3 よしその水はなりとどろきてさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん。

これは素晴らしい言葉だね。天変地異も一向差し支えないと。大したものだね、これは。地震があると、すぐ恐れたりなんかするけれども。地震が来るなら来いと。

私は92歳にもなって、こんなことを言っているんだから、しょうがないけれどもね。仕方がない。百歳を突破してでもやらなければならない。私は烈々たる魂をもっていますから、いい加減なことで決して私は死にませんから。大体、

「死ぬ」

という言葉は嫌いなんだ。

「往生」

です。あちらへ往って生きる。まだまだこれから大いに、詩戦を戦います。

9 エホバは地のはてまでも戦闘たたかいをやめしめ弓ほこをおり戈いくさをたち戦車いくさぐるまを火にてやきたもう。

10 汝等しずまりて我の神たるをしれ。われはもろもろの国のうちに崇められ、全地にあがめらるべし。

11 万軍のエホバはわれらと偕なり。ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。

素晴らしいね、この詩篇46篇というのは。これは詩篇中の詩篇といつてもいい。非常に



戦闘的であるとともに非常に福音的な内容を持つている。(ルターの歌を独唱)。

2 我らの力何をか為し得ん、

我ら忽ち失わるべし。

我らのために戦つ義人あり、

神自らの撰びの人ぞ。

たずぬるか、かは誰と。

その人はイエス・キリスト、

万軍の主なる御神ぞ。

いかなるあだし神にも非ず。

戦の場はその聖手にあり。

さすがは、ルターの宗教改革の進軍の詩だといわれるくらい素晴らしい詩です。ルターはいい宗教改革をしてくれました。

「ルターなくしてはゲーテもない」

といわれるくらいです。ドイツの精神文化の根底をつくったのはマルチン・ルターです。

●キリストと一つにされている

なにしろ、聖書には圧倒される。

「分かるの、分からないの」

ではない。

「参りました!」

と降参すると、その世界に入れられる。中に入れられる。キリストと一つにされる。

「我なんじのうちにあり。汝わがうちにあり」

と、キリストが仰ってください。平伏して、

「ありがとうございます!」

の他に言いようがない。それを体験をしなければ、キリスト者とはいえない。

「信じています」

ではない。

「私は信じてなんかいない。私は一如にされています、キリストと一つにされています」

と。無条件に降参して、「ありがとうございます」の他に言いようがありません。絶対に自分の如何に関わらない。いや、だめなやつほど、しょうがないやつほど、キリストは捕まえてくださる。

私は監獄に行つて、監獄にいる人たちに一席やりたい。

「あなた方、出たら、聖書を読め。そしたら、獄にいたことが本当の恵みになるぞ」



と。彼らは別人になる。獄の中で聖書を読ませたつて本当はいいのではないのか。
「あ、こんな書があつたか」
と。なにかすべてもつたいぶっているね。もつたいぶる必要はひとつもないんだ。
テルシュテーゲン（ゲルハルト・テルシュテーゲン1967～1769。ドイツの神秘主義者、詩人、
讃美歌作家）のドイツ語の詩に、

「わが魂よ、主により頼め。一切を彼に任せよ。

すべてのことがだめになつても、彼は必ず助けてくださる。

神さまは我々を決して捨てない。

いかなる患難も、この助け手である神・キリストより大きなものはない。

信実なる神さま、あなたは永遠の忠実をもつて、

患難における救い手として我々の魂を必ず救ってくださいる。」
とある。

●間違つた民主主義

この頃の若い人たちは、お父さんお母さんに対する尊敬の念がどうも薄いようだね。これは間違つた民主主義が、何でも平等だと思つている。冗談じゃないよ。感謝の念が非常に薄くなつてきた。何でも当たり前だと思つている。冗談じゃない。日本の教育はよほどやり直ししないとだめだね。偉大な宗教をもたなければ、本当はやり直しはできません。学校の先生がそれだけのものを持たないから困つたものだ。

仕方がない、あなた方が家庭において大いに教育改革をしていただかないと。とにかく、この福音をいただいている者はいろいろな課題と責任があります。そういう意味で真理の戦いをしていかないとね。日本は偉大な宗教を持たないと、日本は偉大な国民になれないね。民間宗教なんかやっていることでは。それから、教育者、大学の先生、みんなしっかりしないと。

結局、聖書をそつちのけにしているはだめなんだ。聖書は世界の經典である。あなた方の友人や何かに大いに読めと勧めてやつてください。ところが、聖書はなかなか売つてないので困るんだ。普通の本屋では売つてない。情けないね、全く。とにかく、あなた方も、戦うべきものは大いに戦ってください。

●聖霊の火を投ぜん

「キリストに圧倒されて生きている。降参して生きている」

これが私の告白です。信じてなんかいません。こつちから信ずるの信じないと、そんなことではない。キリストというのは大変なひとです。聖書の旧約新約を全部通じて、福音書はなんといつても聖書の中心です。キリストの言葉とキリストの行為が中心になつて



いるから。キリストというひとは無者で、神一切のひとである。

「我何^ごことも為しあ^たわ^ず」

という。

「神さまに言われて、神さまの力でやっているだけののはなしだ」

と。だから、

「無者キリスト」

なんです。そういう無の現実^{じつじ}に徹する。徹せざるを得ない。

「ありがたくてしょうがない」

というわけです。皆さん、同感でしょうね。

「そうですか」

ではないんだ。

「全くその通りです!」

というわけです。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来^{きた}れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を

をか望まん。⁵⁰されど我には受^せくべきバプテスマあり。その成し遂げらるる

までは思^{おも}い逼^{せま}ること如何^{いか}許^{ばかり}ぞや。⁵¹われ地に平和を与^{あた}えんために来^{きた}ると思う

か。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。⁵²今より後、一家に五人あ

らば三人は二人に、二人は三人に分かれ争わん。⁵³父は子に、子は父に、母

は娘に、娘は母に、^{しゅうとめ}姑は嫁に、嫁は姑に分かれ争わん』(ルカ12・49〜53)

イエス・キリストは聖霊の火を投ぜんためにやってきた。さすがは、キリストの素晴らしい言葉です。私は一番素晴らしい言葉ではないかと思つています。

「受^うくべきバプテスマ」

とは十字架のことです。キリストのバプテスマは十字架なんだ。

「キリストを受けとる人と受けとらない人とが分かれてしまう。キリストを受けとるか受けとらないかで、家の中が分かれてしまう」

というわけです。

キリストの言はいわゆる悟りの言葉ではない。戦いの言葉だ。仏教は悟りの世界だね、穏やかな世界だ。仏教は静かな世界です。しかし、キリスト道は戦いの世界です。サタンとの戦いの世界です。

